

「有馬郡内第一の都会」三田町

「^{おのずか}自ら郡内百事の集る所、又^{ぼんたん}播丹街道の^{ようすう}要枢に当れるを以て、人馬の交通、百貨の集散共に^{しげ}繁く」これは文学者^{たやまかた}田山花袋の編で明治43(1910)年に刊行された『新撰名勝地誌』という旅行案内の三田町の紹介文です。

明治初期の地方行政制度は複雑に変遷します(市史第2巻参照)が、三田という地域を考える上で大きな役割を果たしたのが郡という単位です。現・市域は明治29(1896)年まで旧麻田藩領が川辺郡、旧三田藩領が有馬郡に帰属しました。川辺郡は現在の尼崎市から、有馬郡は六甲山頂から、共に北に長く延びる区域をもち、現・市域はそれぞれの北端に位置しました。

当初、郡は単なる区域の表示でしたが、明治12(1879)年からは行政組織として位置付けられ郡役所が設置されました。川辺郡役所は当時の伊丹町に、有馬郡役所は三田(屋敷)町におかれまして。このうち有馬郡には南に^{ゆやま}湯山(有馬)町、北に三田町という二つの有力な町がありましたが、郡役所の適地としては三田町が選ばれたのです。先に引用した紹介文は、その背景を物語っています。つまり旧陣屋町の三田町は大阪・神戸と播磨・丹波地方とを結ぶ街道の要所、人・物・情報が集まる場所として郡の中心地でもあったのです。



明治40年代の有馬郡役所
(現・ふるさと学習館向い)

その後、郡を自治体として自立させるための整理統合が行われ、明治29年に当時の川辺郡高平村が有馬郡に編入されて現在の市の北側の枠組みが固まりました(市史第5巻)。さらに明治32(1899)年には隣の三輪村に現・福知山線三田駅が開業したこともあり、三田町は「有馬郡内第一の都会」(先の紹介文)と評されるに至ります。

しかし、郡役所は大正15(1926)年に廃止され、三田町の「郡都」としての役割は失われます。また昭和6(1931)年に地理教育の参考書として刊行された『新近^{あんぎや}畿行脚』では、三田町を「近年^{はんか}鉄道開通と共に昔の繁華は見られなくなった」と評しています。役所や鉄道といった近代の社会基盤は、それまでの地域の構造に大きな影響を与えたのです。